



羅針盤



宮地 良樹

Yoshiki Miyachi

京都大学医学部皮膚科 教授
Visual Dermatology 編集協力者

巨星墜つ

1978 (昭和 53) 年 1 月ごろ、当時天理よろづ相談所病院内科レジデントだった私は、京大皮膚科外来に太藤重夫教授を訪ねていた。卒業時、皮膚科志望であった私は、内科開業医の跡継ぎにと切望していた父に「1 年内科をやってもまだ皮膚科を専攻したければそれもいい。皮膚科に行っても内科の知識は役立つはずだから、まず 1 年内科研修をなささい」と説諭され、その 1 年が終わろうとしていた時期だった。メールもファックスもない時代で、私は、今から思えば奇異であるが「入局したいので面談してほしい」という主旨の往復はがきを太藤教授宛に投函し、律儀な字でいただいた「土曜日の外来が終わる頃いらっしゃい」という返信はがきを握りしめて、外来が終わるのを待っていたのであった。

入室しての開口一番は「もう研修医の募集はとっくに終わっている」というひとことであった。私は決断が遅きに失したことを後悔しながら、「3 年したら開業したいので、短期間でも研修させてほしい」「京大にポストがなければ出身地静岡県の浜松医大皮膚科を紹介してほしいこと」などをお願いした。「そこまでいうなら」と、どういう経緯かは定かではないが、太藤教授は「裏口」で入局させてくださった。同期には古川福実先生 (現 和歌山県立医大教授) や岡本祐之先生 (現 関西医大教授) などがおられ、刺激には事欠かなかった。マニュアルを習得するレジデント研修とは異なり、太藤教授は「病気を知るだけでなく、なぜその病気がおこるのかを考える」ことを強調され、カンファレンスのたびに自分が一段ずつ

知的階段を上がっていくことを実感する毎日であった。

翌 1979 (昭和 54) 年 2 月、太藤教授は定年を待たずに京都通信病院院長に転出されることを突如表明された。その日、私は「小皮膚科学書」を新たに購入し、一生皮膚科医として精進することを決めた。今でも当時の「小皮膚科学書」の巻末に「太藤教授の退官意向表明を聞きながら」と日付を記してある。また、父には「当分故郷へは帰らずに大学で皮膚科を勉強する」と連絡している。父は、「これでもう皮膚科で開業することもないと思った」と、後で述懐している。

さしたる展望も野心もなく入局した私を 1 年間でかくも変容させたのは、太藤教授の包容力とこよなく皮膚科を愛する姿勢であったと思う。研究面も含めて私は太藤教授に一度も指示されたことがない。臨床の素朴な疑問から、病態解明を自分で考え、自分で道を切り拓いていき、その成果を臨床に還元するのが太藤流儀であったが、深遠な皮膚科学のおもしろさ、臨床研究の楽しさを「背中で教えて」くださったのが太藤教授であった。おそらく多くの門下生も、私と同じような接点を経験しながら、京都学派の潮流を醸成したものと思われる。その集大成が「太藤皮膚科学」である。

本特集では国際的でオンリーワンの研究を最重視した「太藤皮膚科学」の系譜を俯瞰することで、太藤教授の生きざまに学び、今も脈々と息づく「太藤皮膚科学」の源流を再訪したい。それが若い皮膚科医への「巨星」太藤教授からのなによりの熱いメッセージとなろう。